

団体名	NPO法人ハーフタイム	活動タイトル	虐待やDV被害を受け地域に孤立した子どもの社会的自立支援事業	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景	
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	<p>現実を直視すれば、虐待やDVの根絶が至難なのは人の性であり、であるからこそ、虐待・DV被害児の寄り添いは必須となる。また、「安心・安全」な施設等へ繋がらず、依然と「不安・危険」に満ちた生活環境で生活を余儀なくされている子ども地域には多数存在している。</p> <p>しかし、そうしたケースの支援については、主に児童相談所・子ども総合センター・学校・SC・SSW・民生児童委員・精神科病院等（以下、関係機関等）が担うのが一般的だが、それら関係機関等だけでは限界があることも否めない。</p> <p>そのため、虐待・DV被害児のうち、特に関係機関等だけでは寄り添いをしきれず地域に孤立した子どもたちに対して、それを補完するための寄り添い手の存在が必須であり、そうした寄り添い手の支援を得ながら子どもたちが社会的自立を目指すようになることが望まれる。</p>	2019年12月	 <p>子どもと学生ボランティア等とで昼食を囲んでいる様子</p>	
●団体の社会的役割(ミッション)	<p>ビジョン欄にて記載のとおり、地域に孤立した虐待・DV被害児が社会的自立をめざすためには、関係機関等に加えて、さらにそれらを補完するための寄り添い手があることが望ましい。</p> <p>そのようななか、当会は、葛飾区ですでに10年近い活動実績があり、関係機関等からの信頼も厚く、関係機関等だけでは支援しきれないより深刻なケースの委託を受けて並行して重層的に支援を展開したり、中・高校生など高齢児の支援終了後の引き継ぎも行ったりとしているところである。</p> <p>そこで、当会としては、まさにそうした地域での寄り添い手としての役割を担い、関係機関等とも連携の上、重層的・長期的な支援を展開し、虐待・DV被害児の一件一件の着実な社会的自立を支援する団体として、社会的な価値を發揮していきたい。</p>			
●団体の活動基盤	<p>●活動資金：当会では現状、有給の非常勤職員1名であり、当該職員に業務が偏っているほか、基盤も非常に弱いものとなっている。こうした弱い基盤を強化するためにはより多くの財源確保が必要となってくるため、まずは本助成期間内において「特別認定NPO法人」の申請に取り組み、信頼性の向上や寄付控除等の案内をしつつ、これまで以上の寄付金確保をめざす。またHPの更新頻度やFace book・クラウドファンディングページの投稿数・内容面の充実を図っていく。</p> <p>●ナレッジ：団体のミッションやこれまで蓄積されている子どもとの接し方等をまとめたマニュアル等、子どもや学生ボランティア等の成長を測定するための指標、並びに、学生ボランティア等の役割分担・責任などを明らかにする規約を作成し、より適正かつ効率的な運営体制をめざす。</p>			
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
<p>本事業では、東京都葛飾区において、虐待やDV被害を受け、地域に孤立している子どもたち（以下、「事業対象児」と言う。）に関して、主に以下の活動を展開した。</p> <p>(1) 家庭等訪問：事業対象児に対して、学生ボランティア等が家庭等へ訪問し、子どもが社会的自立の道へ歩めるよう、日々の寄り添いをおして信頼関係を構築しながら支援を行った。</p> <p>(2) 学生ボランティア等研修会：学生ボランティア等が寄り添いのノウハウを獲得し、子どもたちにとって「信頼できる相談相手」となれるよう研修会を実施した。</p> <p>(3) 指標づくり：当会ではこれまで活動の成果を測定する指標を有していなかったが、本事業をおして学生ボランティア等のスキルアップを可視化できる指標づくりに取り組んだ。</p> <p>(4) 活動基盤強化：団体HPやSNSにて活動内容を発信したり、他団体の研修会等にも登壇して情報発信をしたほか、認定NPO法人申請手続きを進めるなどして寄付の増額を図るとともに、子どもとの接し方をまとめたマニュアル等も作成して運営体制の基盤強化に取り組んだ。</p>		<p>(1) 家庭等訪問 ほとんどの子が支援開始当初は事業統括スタッフとしか相談ができなかったが、本事業をおして、以下のように「信頼のおける相談相手」を見つけてあげることができ、社会的自立への道へ進むことができた。 対象児数（延べ人数）：中学生3人（延べ85人）、高校生・高校生年齢4人（延べ69人） 活動回数：119回 信頼のおける相談相手：3人の子が5人の、2人の子が1人の新規の相手を見つけてあげることができた。</p> <p>(2・3) 学生ボランティア等研修会・指標づくり 初回の活動参加時は、多くの学生ボランティア等が子どもの相談相手になることができず、他の先輩スタッフがいなければ交流できなかったが、事業終了時には他のスタッフがいないともスムーズに子どもたちと交流ができるようになった者を多数輩出した。 事業に参加した学生ボランティア等の実数（延べ人数）：12人（延べ89人） 調査項目：「対象児への理解」「支援の見通し」「対象児との関係性」「把握した情報の共有」「虐待・DV等に関する理解」といった5つのスキルアップ項目を3段階で設定し、活動参加当時から事業終了時までをとおしてスキルアップをめざしたことにより、5項目中4項目で10人以上が3段階評価のうちで最高評価であるA評価に達することができた。</p> <p>(4) 活動基盤強化（主なもの） 研修会等の登壇（当会主催2回、葛飾区社会福祉協議会等他団体主催4回） 寄付の増額（18年度94.9万円⇒本助成期間1年分約172.4万円、約1.8倍） その他（20年4月発行『東京都子供・若者計画（第2期）』にて当会の活動が掲載）</p>		
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
<p>①当会ではこれまで、学生ボランティア等に対して、当会に参加する際の初回研修、また毎回の活動後の振り返り、また年に数回行う集まりでの研修会等を行いながらスキルアップを図っていたが、活動の成果を測定するような指標を有していなかった。</p> <p>本事業をおして、この度、学生ボランティア等のスキルアップを可視化できる指標を作成でき、職員・学生ボランティア等ともに各自の強み・弱みなどを把握しやすくなった。</p> <p>②当会は、葛飾区内の子ども食堂を始めとした他の子ども支援団体と比較し、抱える生きづらさが深刻な子どもを多数受け入れているが、今回指標や子どもと接する際の注意マニュアルなどを作成したことで、そのノウハウを他の子ども支援団体に今まで以上に発信しやすくなった。</p> <p>なお、2020年7月の葛飾区社会福祉協議会主催研修会「かつしかボランティア学（前期）」などでも本事業スタッフが講師を務め、さっそく情報発信を行った。</p>		<p>①本事業では、関係機関等による支援の限界部分を補完できるような活動を行い、たしかにそうした補完ができた部分もあるが（「受益者の具体的な変化」欄参照）、あくまでもボランティア活動である以上、その限界もあった。例えば、特定のスタッフが学業との関係で活動参加回数が低調になったり、就職等で活動から抜け切ったりなどであり、関係性構築に時間を要する事業対象児への寄り添いでは大きな痛手となった。</p> <p>②こちらがいくら子どもに対する成果目標や指標を作成しようとも、成果目標等の達成を遅らせる外的要因が存在する。たとえば、当会とは関係のない事情で本人が精神的に不安定となって面談が途絶えたり、中学3年生で進路の相談を優先せざるを得ないときなどである。そうした際、成果目標等の達成の優先もできるが、それは大人側の都合であって、子どもを中心に置いた寄り添いの観点からは決して望ましくない。そうした成果目標等の達成と、子どものそのときどきの最善とのバランスを取ることが非常に困難であった。</p>		
この1年間の活動を通じて		<p>虐待・DV被害児への寄り添いのほか、そうした子どもたちへの寄り添い手のスキルアップ項目の可視化等を達成しました。</p>		
		<p>■ 受益者の具体的な変化（効果測定結果等）</p> <p>いわゆるゴミ屋敷に住み、学校担任も年に1度も面会ができていなかった中学生女児が、本事業で安定的に面会ができた上、新しい学生ボランティア等を「信頼のおける相談相手」としてスムーズに交流できるようになるほか、本事業で場をセッティングし、本事業スタッフが同席することにより、学校担任との初めての面談（学年修了証の授与）を実現できたケースも輩出することができた。</p>		